

# 窯業と芸術とのコラボレーションによる 新規市場参入への取組みにおけるプロセスの実践的研究 ～ ARITA×SOGETSU PROJECT ～

Research on processes in efforts to enter new markets  
through collaboration between the ceramic industry and the arts  
～ ARITA×SOGETSU PROJECT ～

本田 智子  
Tomoko HONDA

佐賀大学 肥前セラミック研究センター  
Ceramic Research Center of Saga University

キーワード：デザイン支援、産地振興、市場開拓、人材育成

## 研究概要

佐賀大学肥前セラミック研究センターでは、肥前窯業圏<sup>1)</sup>の産業振興を目的として研究活動を行っている。本研究は窯業（有田焼）と芸術分野（いけばな・草月流）とがコラボレーションし、高度な技術をベースとした新しい表現や芸術的価値といった有田焼が持つ強みを最大限に引き出しながら、新たな分野への商品開発への取組みを通じた産地振興のプロセスのモデル化を目指している。

本論文ではその一つの取組事例を取り上げ、有田焼窯元といけばな草月流<sup>2)</sup>師範が協働で花器を開発し成果品発表に至るまでの過程で、製品開発だけでなく花器製作工程を記録した映像の公開、いけばな作品としての製品発表形態、本研究の Website 制作公開、地域に向けたいけばな関連イベント開催等による効果を検証し示したものである。

### 1. はじめに

一般的に研究者が専門とするデザインとは、製品のスタイリングと捉えられがちであるが、それは目に見える最終的なアウトプットの一部に過ぎない。デザインの役割とプロセスの大部分は、その時々々の社会や事業が直面する課題の解決である。事業者とユーザーの双方を理解し、時には翻訳者として両者の隔たりを埋める役割や、社会を広く俯瞰し、当事者が見ていなかった視点から課題の解決を探るのが本研究におけるデザインという行為である。

デザインは社会に直結した実践・実理の学である。研究代表者は、学術研究が何らかのかたちで地域産業の存続・発展に貢献することが、大学における産地振興の一つのあり方であり、学術研究を通して大学と産地の事業者がともに地域の経済的発展を遂げる道を探ることが使命であると考えている。

本研究は、地域の産業がこれまで以上に大学と密接に連携しながら、協働してプロジェクトを進めていくものであり、地域の価値を高め、理解してもらうための

ものである。また本研究が産業や経済・芸術・地域における人材育成に対してもたらす効果があるかどうかを、厳しい視点から評価を受けることが次のステップに進むための重要な指標になると考えている。

ここでは窯業（有田焼）と芸術分野（いけばな・草月流）とがコラボレーションし、技術をベースとした新しい表現や芸術的価値といった有田焼が持つ強みを最大限に引き出しながら、新たな分野への商品開発への取組みを通じた産地振興のプロセスのモデル化を目的とする。

有田焼窯業者と草月流の二者の共同作業において、研究者が創造的なプロセスの組み立てと場作りをファシリテートし、その過程の記録・分析・評価・公開を行う。それを産地窯業者が新規市場開拓のロールモデルとして参考にすることで、商品開発において自ら発想し、行動することを促し、産地の開発面における自立を促す。また技術・表現力のレベルの高い華道家が、地元窯業者・住民・学生を対象にいけばなデモンストレーション（いけこみ実演）やいけばな体験教室を行い、ナマの芸術活動に触れることの少ない環境下において、観覧者・参加者の創作意欲・活動にも刺激を与えることを期待する。

具体的には以下にあげる 4 つの基本的な取組を長期的に継続させ、研究協力者や活動範囲を年度ごとに拡大し、最終的には肥前窯業圏全体における活性化を図る。

- ① 草月流華道家と有田焼窯元が協働で花器を開発
- ② 草月流華道家によるいけばなの展覧会、体験教室等を開催
- ③ ①で開発した花器を用い、いけばな作品として研究発表展を開催
- ④ 花器開発の打合せの様子や製作現場を動画にて記録し、研究発表展やウェブサイト等において公開

## 2. 研究の背景

### 1) 有田焼の歴史と現状

日本全国に存在する多くの工芸品産地は、その発祥は主に生活必需品の調達であった。それゆえその用途や製作技法は土地の生活様式や自然環境に強い影響を受け、また物流が未発達な時代においては、工芸品の原材料は現地で調達できるものに限られていた。ところが有田焼の歴史はそのような他の工芸品産地とは大きく異なる。

日本遺産<sup>3)</sup>に認定されている九州北西部、佐賀県と長崎県にまたがる 8 つの窯業産地、肥前窯業圏は、現在の佐賀県唐津市を治めていた戦国大名・波多氏が、1580 年代ごろに朝鮮から陶工を招いて窯を開いたとされるのが始まりである。ほどなく金ヶ江三兵衛（李参平）が有田の泉山で良質な透析を発見、彼は泉山の磁石を使い日本で初めて磁器単独の窯場を作ったとされている。

有田で磁器がはじまってからおよそ 30 年後、中国から伝わった技法をもとに初代柿右衛門らが日本で初めて赤絵の焼き付けに成功。磁器の白さに映える多彩な図柄が表現されるようになった。1650 年代からは、有田焼はオランダの東インド会社（VOC）により東南アジアやヨーロッパ各国に輸出され始める。ヨーロッパの王侯貴族の間では、磁器を所有することはステータスシンボルにもなった。1660 年頃、佐賀藩は伊万里大川内山に藩窯を移し、採算度外視で献上用の磁器を創り始め、そこでは「藍鍋島」「色鍋島」「鍋島青磁」など 1871 年に廃藩置県が行われるまで、佐賀藩直営の藩窯にふさわしい格式のある磁器が生産された。<sup>4)</sup>

幕末から明治期の有田焼は、ヨーロッパを中心に盛んに開催された万国博覧会で名声を得る。パリ万博（1867 年）、ウィーン万博（1873 年）、フィラデルフィア万博（1876 年）、パリ万博（1900 年）に積極的に出品し、ジャポニズムの流行とともにヨーロッパ各地へと伝播し、海外で評価された。<sup>5)</sup>

李参平から始まって約 400 年続いている現在の有田焼は、現在美術工芸品だけでなく主にレストラン、割烹やホテル、旅館等に向けた業務用食器の生産が主流である。加えてタイル、磚子、ファインセラミックス等の工業製品の製造も行われている。

これまでの有田焼産地では、商社が全国の顧客から注文を受け、製造を窯元に発注するという流れが一般的であったが、有田焼創業 400 年事業<sup>6)</sup>（2016 年）をきっかけに、商品開発から販売まで一貫して自社で行う企業も出てきており、さらに複数の窯元が出資して新たな会社を立ち上げ、それぞれの特性をいかして作業分担を行う等の新たな動きがみられる。

### 2) 有田焼の課題

有田焼産地においては、近年主力の業務用食器市場が縮小しており、さらに 2020 年からのコロナ感染症拡大により観光業、飲食業の業績悪化の影響を受け、現在の有田焼生産高はピーク時に比べ 7~8 割減とされる。<sup>7)</sup> また次世代の消費者の価値観の変化による今後のやきもの需要の縮小が予想されており、有田焼がこれまでターゲットとしてこなかった分野への市場開拓は喫緊の課題である。

また有田焼の商品開発においては、最も重要な企画やアイデア出しの部分に造り手（窯業者）が関わることは少なく、さらに現在の市場を元に新規商品を考える、フォアキャティングの手法を元に商品開発を行うことが一般的である。これらの点が新規市場への進出を阻んでいる大きな要素であると考えられる。産地として継続するためには、これら課題点をクリアーし、その特徴を活かした施策を元にした産業振興策が求められている。

### 3) 有田焼の強みとは何か

有田焼は前述のように 16 世紀に朝鮮から陶工を招いて窯が開かれたことをきっかけに、その後御用窯（佐賀藩直営の藩窯）として、採算度外視のきらびやかで高い技術が極められ、さらに幕末から明治にかけては万博への出品によりヨーロッパなど諸外国に向けて盛んに輸出が行われるなど、日用品の産地として自然発生的に生じた他の工芸品産地、窯業産地とは大きく異なる歴史を歩んできた。

そうして確立した現在の有田焼の特徴は、薄く硬い生地に施した繊細な絵付けに見られる高い技術という評価が一般的であるが、それに加えて有田には十数代、400 年近く受け継がれてきた窯元も多く、そのように代々に渡って有田の地に住み続け、やきものを作り続けてきた中で培われた美意識が現在も脈々と受け継がれている。それもまた有田の強みであると考えられる。

### 4) いけばなとやきもの関係性

一方いけばなは人びとが野の花を神仏に供えることから始まったとされる。その後「立花」「立華」「生花」などの様式の変遷を繰り返して伝承され、時代に応じて発展を遂げながら常に人々の生活の中で身近な存在で

あった。現在では 300 程も流派があるとされている。

「迎陽記」によれば 1380 年の「花御会」において『当時中国から舶載された唐物花瓶に花を挿し(中略)楽しんだ』<sup>8)</sup>とあり、花器がいけばなの創成期から重要な役割を果たしてきたと考えられる。

食器は食材が盛り付けられることによって、花器は花材がいけ込まれることではじめて「うつわ」としての存在が全うされるものである。花器はいけばなの創成期から重要な役割を果たし、造り手(窯業者)が関わりながら伝統的に作られてきた。いけばなの日本三大流派<sup>9)</sup>のひとつである草月流では、師範クラスが関東・中部・北陸圏等の主に陶器産地に花器を個人発注・制作しているにも関わらず、有田における花器の制作はほとんど行われていなかった。これは、有田焼に対する一般的なイメージが『高価』『伝統的文様』『華奢』であり、花器に適さないやきもの産地として認識されてきたためである。また華道家が窯業者に花器のデザイン形状を発注し決定するまでの過程は、通常の製品開発におけるデザインシンキングの過程と全く異なる手法であること、さらに造り手(窯業者)と使い手(華道家)は発注者と受注者としての立場関係であり、企画製作当初からディスカッションしながら花器を共同制作することは稀であった。

### 3. 研究者の役割

これまでは窯業者と華道家は、一方通行の制作プロセスをとってきたが、本研究においては研究者と協力者(窯業者・華道家)が新たな花器開発のためのチーム・共同作業者としてスタートし、双方向での花器制作のプロセスを実行する。

その際、双方の専門性や価値観の相互理解・共有が重要であることから、打合せや視察のために現地に足を運ぶだけでなく、互いの創造の背景を理解するワークショップや講義を行い、互いに抱くイメージの隔たりを取り除き、その中で創造性を発揮できる環境を作り出す。研究者の役割はそのような創造的なプロセスの組み立てと、創造的な場作り(プロセスコンサルテーション)をファシリテートすることである。

### 4. 研究協力者

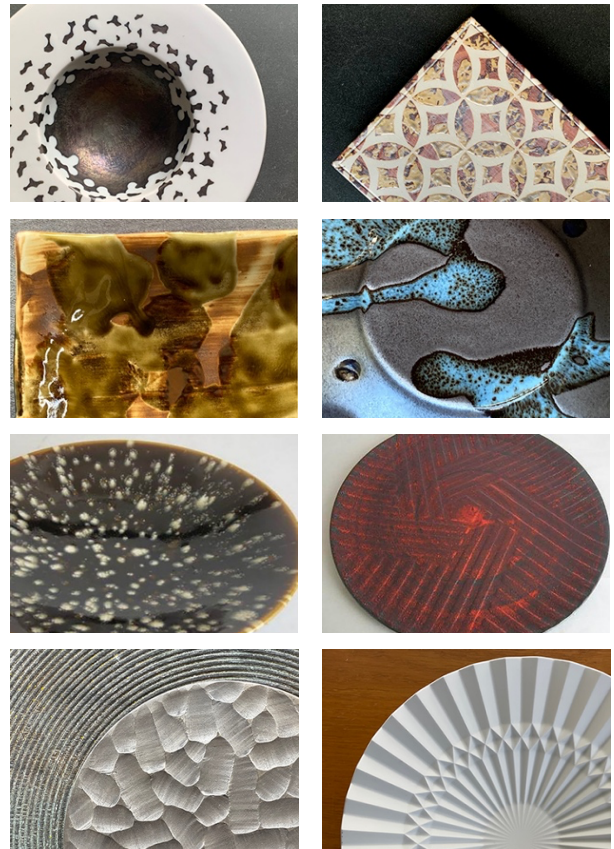
#### 1) 花器製作

有田焼窯元 (株)ARITA PLUS 4名

- ・寺内 信二氏(株式会社 ARITA PLUS 代表 / 有限会社 李荘窯業所 代表)
- ・原田 耕三郎氏(株式会社 原重製陶所 取締役)
- ・徳永 弘幸氏(株式会社 徳幸 代表取締役社長)
- ・原田 吉泰氏(有限会社 吉右エ門製陶所 代表)

世界中のシェフとのコラボレーションによりプロユース

の食器を開発する、多彩な個性を持つ7つの窯元の集団(今回協力者はうち4社)。有田焼の伝統技術に加え、CADを用いたNC切削加工型による成形方法を得意とし、この分野では全国の他の窯業産地をリードしている。



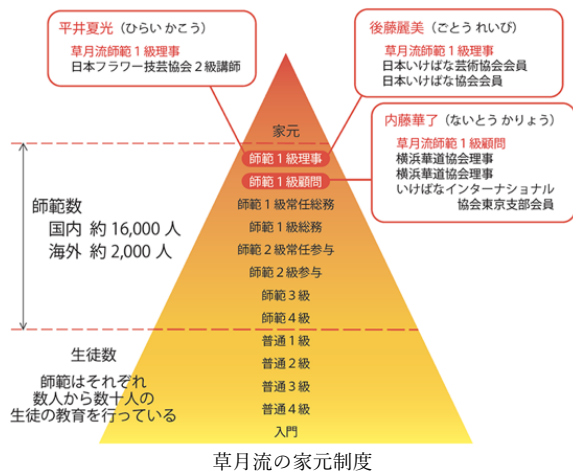
(株)ARITA PLUS 製品例

#### 2) 花器デザイン提案、研究発表展いけこみ

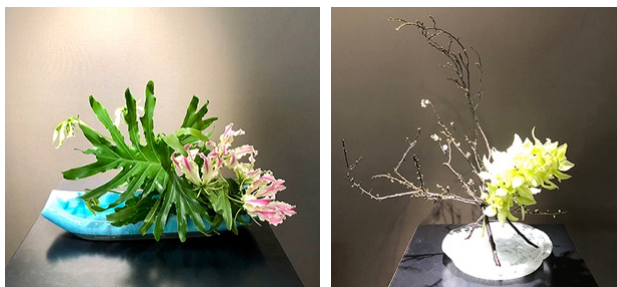
草月流師範 3名

- ・内藤 華了氏(ないとう かりょう)、  
草月流師範1級顧問
- ・後藤 麗美氏(ごとう れいび)、  
草月流師範1級理事
- ・平井 夏光氏(ひらい かこう)、  
草月流師範1級理事

草月流は初代家元・勅使河原蒼風氏が「個性」を尊重した自由な表現を求めて 1927 年創流。現在に至るまで、多様化する現代空間にふさわしい新しいいけばなの可能性を追求するとともに、様々な分野のアーティストとのコラボレーションに積極的に取り組む。他のいけばなの流派に比べ型にとらわれない自由な発想、場に応じた自在な表現力など芸術性に秀でている点、また発表の場(家庭にとどまらず、各国大使館、ホテルロビー、美術館や官公庁などの大規模公共空間、商業施設等、国内外において多岐にわたる)が広いことも特徴である。



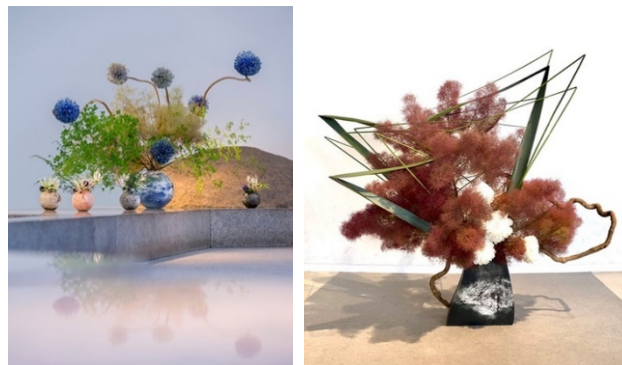
草月流の家元制度



草月流メンバーのいけばな作品例

打合せを行い、寺内氏の感性を発揮しながら最終製品にまで仕上げた。

このテストケースを行ったことで花器の納期、厚みや重さといった、花器に要求される機能面での条件についての知識を共有し、その後の本格的な制作における下地となった。また早期に作品発表したことで、観覧者の反応を知ることができ、12月に開催する研究発表展への期待にもつながった。



家元継承 20 周年記念草月いけばな展 草月会東京西支部展 (寺内・後藤) 「創造の空間 2021」(寺内・内藤)



横浜名流華道展 (寺内・内藤)

- 3) 打合せ及び花器製作工程の記録映像制作編集  
有田町役場 まちづくり課 地域おこし協力隊  
壱岐 成太郎氏
- 4) 広報協力  
有田町役場 商工観光課 地域活性化企業人  
ANA 総合研究所 兼頭 理織氏
- 5) 研究発表展いけこみ  
草月流華道家 7名

## 5. 先行研究 (2021年4月～7月)

草月流では頻繁に花展が行われている。特に今年度は勅使河原茜家元の家元継承 20 周年展が開催されるなど、発表の機会に恵まれている年であった。このため、チームとして研究を開始する前に、寺内氏と内藤氏、後藤氏の3名によるテストケースを研究に先行して行った。

ここではこれまでに世界のレストランシェフと度々コラボレーションを行ってきた寺内氏の経験が十分にいかされ、華道家から提出されたアイデアスケッチを参考にしながら、リモートのみで形状の詳細やテクスチャーの

## 6. 研究協力者を対象とした第1回アンケート調査

(2021年8月)

コロナ感染症対策により、華道家の有田訪問が大幅に延期され、当初予定していたワークショップ等の開催が困難となった。このためチーム・双方向によるディスカッションではなく、窯元と華道家への個別のアンケート調査を行い、結果を共有する手法に切り替えた。またオンラインによるミーティングを行いながら相互理解を深めた。ここでは自らを客観的に評価し、また漠然とではあるが今回の取組に向けて各自が目的を持つこと、それをメンバーで共有することによりチームとしての意識が生まれた。

アンケートの質問事項は「研究への参加理由」「それぞれが抱える現状の課題」「それぞれが持つ強み」「今年度の目標・テーマ」「取組のゴール」「取組を通して次の世代に残したいこと、伝えたいこと」等の18項目である。コロナ感染症対策のためやむなく行ったアンケートであったが、意外なことに短い文章にすることで対面のミーティングでは引き出しにくい、有田焼やいけばなに対するイメージ

や日頃から何となく抱いている疑問点などをそれぞれが改めて考えるきっかけになり、またそれを共有することも容易になった。

### 第1回アンケート調査結果

質問は、A. 参加メンバーがもつ有田焼・草月流それぞれに対する自己イメージを探り、B. ARITA × SOGETSU プロジェクト開始に向けての目標、課題、また異業種という心理的な障壁を探り、メンバーのモチベーションの向上にも役立つ内容とした。

回答からは参加理由の違い（有田：市場開拓や新しいことへの挑戦など具体的・積極的な理由、草月：有田焼に興味がある、知人からの誘い等、漠然とした理由）が明らかになり、また有田からは現状の課題点が多数あげられ、その課題は草月と有田に共通している「従来の有田焼がもつイメージ」に起因していると考えられる。さらに A. 6～9 の設問からは就業の経緯に関わらず、各人が自らの仕事に誇りをもって取り組んでいることが伺われ、また A. 9 は花器という「もの」の開発だけでなく、花器を用いた芸術としてのプロジェクトの可能性を示唆している。

このアンケートにより今後プロジェクトを進めていく上で目標となる以下のいくつかのキーワードが得られた。

A～「新しいことへの期待」「可能性への挑戦」「新しい切り口からの表現」「付加価値のあるものづくり」「使命感のようなもの」「アイディア、工夫、技術」「新しいものを作りあげた時の喜び」「型にはめない」「楽しむ気持ち」「世界的」「好奇心」「子どもや青年のいけばなの教育に力を入れてきた」「伝統文化でありながら新しい技法を取り入れ現代の生活スタイルと合わせられる」「発信力」「次世代への継承」

B～「相互理解を深める」「信頼関係の構築」「出会いのおもしろさ」「多様性の表現」「未来を想像→ものづくり」「実用性」「独創的」「既視感の無さ」「型にはまらない」「有田焼の一つの市場として確立すること」「今までのイメージを越えるもの」「時代の柔軟性」「伝統文化の魅力」「価値」「値段」「結果を出す」「結果を急がない」

これらのキーワードは今回のプロジェクトだけでなく、今後有田焼の市場を考える上で目標とすべき要素であると考えられる。

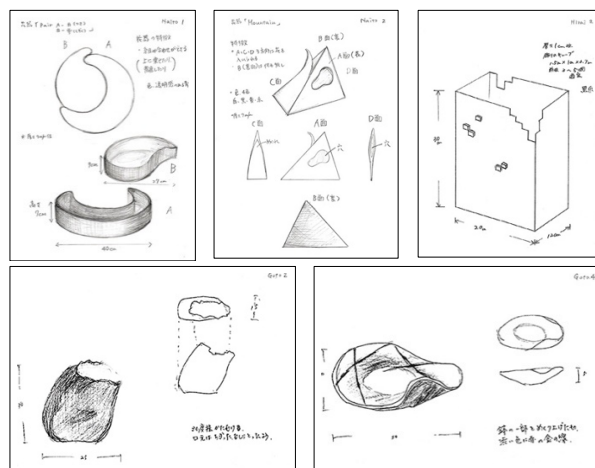
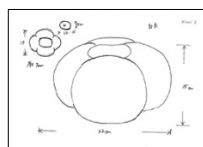
現状に関する質問	有田	草月
1. 参加理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>面白そう</li> <li>新規市場の開拓(2)</li> <li>何か新しい事への期待</li> <li>可能性への挑戦</li> <li>ARITA PLUS メンバーとして</li> <li>販路拡大</li> <li>新しい切り口からの表現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>やきものが好き</li> <li>有田焼に興味があった</li> <li>デモ教室同期とのつながり</li> <li>メンバーからのお誘い</li> </ul>
2. 有田焼のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> <li>磁器</li> <li>白磁の絵付(染付、赤絵)</li> <li>料理屋さんの器(普段使いではない・余白・パターン化)</li> <li>現代生活との解離</li> <li>陶業の最新の素材を使用</li> <li>他産地と比べて値段が高い</li> <li>染付、赤絵</li> <li>伝統(2)</li> <li>高い、古くさい</li> <li>白×青</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食器(2)</li> <li>藍色と白</li> <li>うすい</li> <li>高級</li> <li>陶器市</li> <li>柿右衛門</li> <li>絵付き</li> <li>伝統</li> <li>模様の入った食器</li> <li>高級(2)</li> <li>伊万里</li> </ul>
3. 有田焼／草月流の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存の市場の縮小</li> <li>従事者(職人)の高齢化(3)</li> <li>売価設定があいまい</li> <li>固定概念</li> <li>付加価値のあるものづくり</li> <li>産地的ブランドは強いが各社のブランドが弱い</li> <li>後継者不足(特に作り手が顕著)</li> <li>ネームバリューなど</li> <li>消費地との距離が遠い</li> <li>多様な食文化に対応する力</li> <li>売れたら真似がすぐ出てくる</li> <li>現代の生活に似合うものづくり</li> <li>磁器の可能性新規分野へのチャレンジ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>若者へのアピール</li> <li>会員数減(3)</li> <li>視野を広げたい</li> <li>発信力</li> <li>次世代への継承</li> <li>海外への伝承</li> </ul>
4. 他産地／他流派と異なる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>少量多品種の生産に対応</li> <li>製造技術の多様性</li> <li>産地内の原料が統一されているので色々ラク</li> <li>ブランドとして確立している</li> <li>歴史に裏付けされたブランド力</li> <li>歴史</li> <li>知名度</li> <li>分業制</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自由</li> <li>発想</li> <li>現代の生活スタイルに合っている</li> <li>空間芸術</li> <li>自由な表現</li> <li>型にはめない</li> <li>他分野とのコラボレーションができる</li> <li>デパートのディスプレイなど</li> <li>商用としても活動の場がある</li> <li>どんな空間にもいけることができる</li> </ul>
5. 他産地／他流派に比べて優れている点	<ul style="list-style-type: none"> <li>少量多品種の生産に対応</li> <li>製造技術の多様性</li> <li>高い技術</li> <li>小ロット生産</li> <li>品格の有無</li> <li>素材の強さ、色の多様さ</li> <li>小さな会社が多いので、各社のカラーがそれぞれある</li> <li>400年のネームバリュー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>想像力</li> <li>発見力</li> <li>挑戦する気持ち</li> <li>他のアートを学ぶ姿勢</li> <li>自由な表現</li> <li>型にはめない</li> <li>基本型から応用型まで変化を加えていける</li> <li>デモンストレーションを後ろいけける</li> <li>小さな空間や大きな空間など、場に合わせていける</li> <li>どんな空間にもいけることができる</li> <li>生の花から異質素材まで多種多様な材料を組み合わせ表現できる</li> <li>器を使っても器が無くても表現できる</li> </ul>
6. 有田焼窯元／草月流華道家をしている理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>家業だから特に葛藤はなく</li> <li>使命感のようなもの</li> <li>家業だから(2)</li> <li>1917年創業</li> <li>言語に近いそれが焼き物だったということ</li> <li>窯業に携わる幼少の頃からの決心</li> <li>家業→天職</li> <li>モノ作り以外の選択肢がない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>偶然</li> <li>おもしろそう</li> <li>自分の価値観と合っている</li> <li>芸術性があり現代に合っている</li> <li>近くに教室があった</li> <li>初代家元の勅使河原蒼風に感銘を受けた</li> </ul>

現状に関する質問	有 田	草 月
7. やきもの／いけばなに関して自分のすぐれた点	<ul style="list-style-type: none"> <li>転写の技術</li> <li>他の素材や技法を知っている(鍍金)</li> <li>ものづくりが好き</li> <li>クラフト的表現</li> <li>アイデア、工夫、技術</li> <li>会社からのニーズに応える姿勢</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽しむ気持ち</li> <li>花材の色の組み合わせや新しい素材の研究に熱心</li> <li>花が好き</li> <li>シンプルさ</li> <li>好奇心</li> <li>継続力</li> <li>引き算</li> <li>地域のボランティア活動としていけばなを教えている(2)</li> <li>大作も小作も空間にあわせられる</li> <li>子どもや青年のいけばなの教育に力を入れてきた</li> </ul>
8. 有田焼と草月流が共通する点	<ul style="list-style-type: none"> <li>その空間の演出</li> <li>華やか</li> <li>芸術性</li> <li>近代的</li> <li>創意工夫</li> <li>空間の妙</li> <li>配置</li> <li>未来への想像力</li> <li>まだ"草月"について知らない事が多いのでわかりません</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>美しさ</li> <li>世界的</li> <li>実績</li> <li>作品に自分が出る</li> <li>冒険心</li> <li>伝統文化</li> <li>新しいことにチャレンジしている</li> <li>伝統文化でありながら新しい技法を取り入れ現代の生活スタイルと合わせられる</li> </ul>
9. 有田焼と草月流が異なる点	<ul style="list-style-type: none"> <li>存在しうる時間</li> <li>有田焼は物として残る、いけばなは記憶として残る</li> <li>世界的な認知度</li> <li>主役と脇役</li> <li>まだ"草月"について知らない事が多いのでわかりません</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>伝統</li> <li>打ち破る力</li> <li>他のアート受け入れる力</li> <li>家元制度</li> <li>"草月流"は「いけばな」であり時を経て変化していく芸術、「有田焼」は時を経ても変化しない</li> <li>"草月流"は「器」と「花」としての総合芸術であり「有田焼」は「器(花器)」として単体の芸術</li> </ul>
10. やきもの／いけばなを続けるモチベーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しいものを作りあげた時の喜び</li> <li>すごく時々楽しいから</li> <li>創意工夫</li> <li>好きだから</li> <li>新しい表現方法(加飾施など)を見つける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>花が好き</li> <li>楽しむ気持ち</li> <li>生徒さんとの出会い</li> <li>生徒さんの成長</li> <li>草月人との出会い</li> <li>好奇心</li> <li>植物追求</li> <li>いけばなに自分が出る</li> <li>花材の式折々の変化</li> <li>仲間</li> <li>見てくれた人の言葉</li> </ul>

ARITAXSOGETSUに関する質問	有 田	草 月
1. 今年度の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>新規市場への参入(2)</li> <li>今まで作ったことがないサイズの大きな商品(花器)への挑戦</li> <li>相互理解を深める</li> <li>先ずは器として形を作り上げる事</li> <li>有田焼ファンづくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>有田焼の花器にいける</li> <li>出会いのおもしろさ</li> <li>有田焼のイメージを変える</li> <li>美しい世界を表現する</li> </ul>
2. 今年度のテーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様性の表現</li> <li>調和バランス</li> <li>実用性</li> <li>草月流を知る→アイデアを練る</li> <li>独創的</li> <li>型にはまらない</li> <li>脱却</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>有田焼の新しい発見</li> <li>いけばなを知ってもらおう</li> <li>有田焼といけばなの相乗効果</li> <li>Creativity</li> </ul>
3. 長続きさせるには?	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いを認め合う関係性、良好な関係</li> <li>継続的、安定的な商取引</li> <li>しっかりと売上を出す</li> <li>無理をしない</li> <li>"草月"、"有田"それぞれの革命</li> <li>定期的な交流、展示会・コラボ作品など</li> <li>コミュニケーションの継続</li> <li>信頼関係の構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いを知る</li> <li>資金(2)</li> <li>挑戦する気持ち</li> <li>お互いの尊重</li> <li>尊敬</li> <li>融合</li> <li>面白いと思う心</li> <li>結果を出す</li> <li>結果を急がない</li> </ul>
4. 最終的なゴールは?	<ul style="list-style-type: none"> <li>有田焼の一つの市場として確立すること</li> <li>"工芸寄りの産業"的な市場の確立</li> <li>販売</li> <li>"草月"といえ"有田"のようになる</li> <li>理想は双方の納得いく作品</li> <li>草月流のうつわの受皿(デザイン花器)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>有田焼花器の利用増</li> <li>いけばな人口の増加</li> <li>有田焼といけばなの人口を増やす</li> <li>市場の拡充</li> <li>花器としても市場を生み出す</li> <li>新しい有田焼の認知度を広める</li> <li>有田・草月双方の魅力を広める</li> </ul>
5. 客をひきつける要素	<ul style="list-style-type: none"> <li>既視感の無さ</li> <li>空間との順応 or 変化</li> <li>インパクト</li> <li>デザイン</li> <li>価値</li> <li>値段</li> <li>形と装飾性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい発見</li> <li>手にいれやすい価格</li> <li>目にする機会</li> <li>有田焼の気品と伝統</li> <li>繊細な色出し方</li> <li>その器に花をいけたいと思わせるような作品</li> <li>今までのイメージを越えるもの</li> </ul>
6. 誰がファンになる?	<ul style="list-style-type: none"> <li>文化的素養の高い人</li> <li>いけばなを理解する人々、いけばなに興味のある人々</li> <li>草月流を含む花を愛する人</li> <li>花のあるくらしに興味のある方</li> <li>わからない。ただ、華道に興味がない人を惹きつけたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>草月人</li> <li>女性</li> <li>展示会などの使用目的がある上級者</li> <li>海外のアーティスト</li> </ul>
7. 誰に?どこに?発信する?	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外のアート系メディア</li> <li>建築関連のメディア</li> <li>セレクトショップ</li> <li>インスタグラム</li> <li>百貨店</li> <li>雑誌(サライ、和楽、家庭画報、婦人画報)</li> <li>世界中の花好きの人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いけばな人</li> <li>若者</li> <li>文化施設</li> <li>文化雑誌</li> <li>インスタグラム</li> <li>デパート、美術館利用者、関係者</li> </ul>
8. 次の世代に残したいこと伝えたいこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しいことへ取り組む姿勢</li> <li>型にハマらないハマらせない</li> <li>伝統の重み</li> <li>和の心</li> <li>時代、時代で趣向は変化する未来を想像→ものづくり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本文化</li> <li>いけばなのすばらしさ</li> <li>磁器の多様性</li> <li>Creativity</li> <li>時代の柔軟性</li> <li>伝統文化の魅力</li> </ul>
9. 研究者に求めることは?	<ul style="list-style-type: none"> <li>草月流の方との折衝</li> <li>パイプとしてまとめ役</li> <li>活発なやりとり</li> <li>人ともを繋いで欲しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発信し続ける</li> <li>大学へのアピール</li> <li>学生への発信</li> <li>調整</li> <li>スケジュール管理</li> </ul>

## 7. 花器アイデアスケッチの提出 (2021年8月)

華道家はそれぞれ複数の花器アイデアスケッチ(12案)を提案した。その後リモート会議にて作品イメージの伝達を行い、形状や大きさ等を詰めた。また基本的に今回の花器は型を用いて制作を行うため、制作コストや会場構成を調整しながら花器制作数を9点(石膏型数6点)に絞った。



華道家のアイデアスケッチ

## 8. 参考資料の配布 (2021年7~8月)

通常であればまず華道家が産地を訪問し、歴史や技術、製作現場を肌で感じ、窯業者と交流を行うのが最も製作者への理解を深めるのに役立つと考えているが、コロナ感染症対策のため延期が重なり、実施困難となった。

このため華道家には有田焼に関するわかりやすい資料の配布、窯業者には草月流の理念に関する書籍、また最新の雑誌等を配布、また華道家に向けて寺内氏による有田焼に関するリモート講義を行う等、相互理解が進むよう努めた。

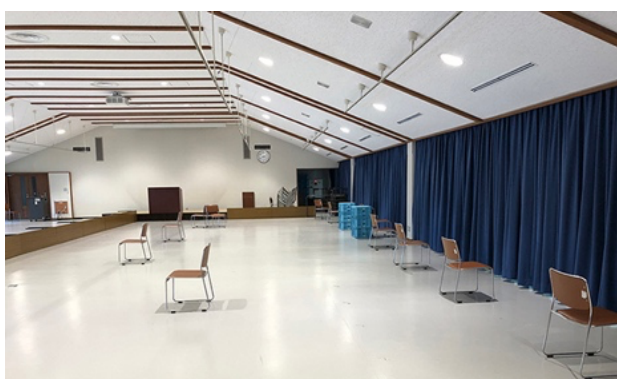
また各窯元から既存の製品の参考画像を収集、冊子にまとめて華道家に配布した。事前に予備知識を入れておくことにより、その後の華道家の有田訪問の際に、スムーズに協議できる環境作りに努めた。



## 9. 作品数・会場構成の決定 (2021年10月)

有田キャンパスプロジェクトルームにて本番と同じスケールで展示デモを行った。これは図面だけでは把握しにくい空間のスケール感を実際のサイズで体験することで歩行導線や距離感、全体の雰囲気を確認する上で有効な手段である。

窯元が来場し、作品配置等を協議、発表当日の作品の間隔や写真撮影環境を再現した。またこの様子をメンバーと動画にて共有し、最終作品数(12点)も決定した。



有田キャンパスプロジェクトルームにおける会場再現の様子

## 10. 花器制作経過の共有 (2021年8~11月)

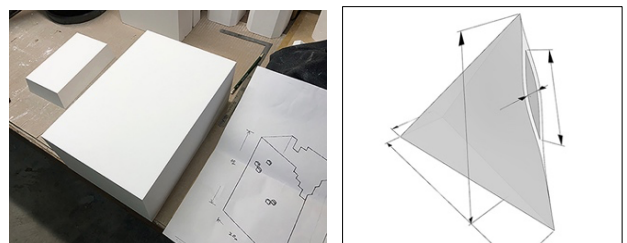
各窯元の制作進捗状況を画像におさめ、随時リモートにて報告、協議を行った。この中では生地・素焼き段階での形状確認、仕上げや納期等に関する議題があがった。

また有田町まちづくり課地域おこし協力隊の協力を得て、窯元での花器制作の様子、華道家の有田訪問(窯元

訪問、有田町内・窯業に関わる工場視察、打合せ等)の様子を映像にて記録・編集し、後に研究発表展およびARITA×SOGETSU ウェブサイトにて公開した。

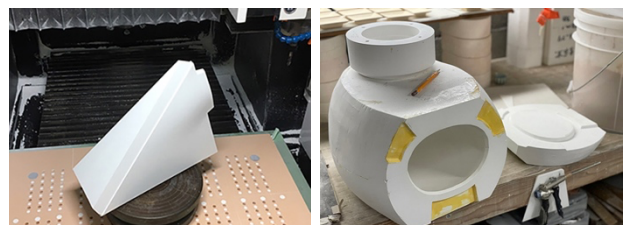


メンバー全員によるリモート会議



切削前の石膏塊

CADによる原型設計



NC切削機による石膏型

NC切削機による石膏型



石膏型から取り出した生地(加工前)

## 11. 華道家有田訪問 (2021年10月)

### 1) いけばな体験教室開催

(於: 佐賀大学 有田キャンパス プロジェクトルーム)

当初佐賀大学有田キャンパスにおいて、草月流講師によるいけばな展覧会、窯元による講演会、いけばな体験教室(30名)を計画していたが、コロナ感染症対策のため大幅に規模を縮小し、参加者を限定していけばな体験教室(10名)のみ開催した。講師は内藤氏が担当した。

この活動は、いけばな体験教室やいけばなのいけ込み実演(デモンストレーション)等を通して、地域の人々が日本文化に触れる機会を増やすことで豊かな日常を創出し、また若い世代がこの活動を通して地元窯業への理解を深め、次世代の後継者や地元に対する愛着心を育成

することを狙いとしている。

いけばなの基本である「型」学び、その中から空間の把握の仕方や素材（花材）の扱い、また制限のある型のいけこみであっても各自の表現が可能なことなどを学んだ。教室開催後に行ったアンケートからは、参加者が自ら手を動かし、いけばなを体感することで花をより身近に感じ、植物の造形の美しさや生命力を感じることが創作の緒となり、造形上の勉強にもなったとのコメントも得られた。この取組を継続的に続けていくことで人材育成および美術教育上の効果も期待される。また体験教室の後、内藤講師が制作されたお手本を有田キャンパスエントランスギャラリーに展示した。

コロナ感染症への対策を十分に行った上で、今後も継続して窯業者、地域住民、学生等に向けて開催したいと考えている。



いけばな体験教室の様子

## 2) 窯元・原材料工場訪問、打合せ

見学地

・原材料工場

田島商店（陶土製造）、深海商店（釉薬・上絵具製造）

・窯元

ARITA PLUS、徳幸窯、瑞峰窯、吉右エ門窯、李荘窯

・文化施設・史跡等

佐賀県立九州陶磁文化館、泉山磁石場、陶山神社

窯元での打合せと並行して、華道家が産地の仕組みを理解するためにやきもの原材料工場を見学した。陶土製造の田島商店では、天草で採掘された磁石（じせき）の解説、川沿いにある建物では以前は巨大な水車を用いて碎石していたこと、水樋による沈着法などを学んだ。また後継者不足など、産地の課題についてもお話があった。

釉薬・上絵具製造の深海商店では、スライドにて会社の歴史、呉須、上絵具、釉薬の解説があり、やきものに対する理解が進んだ。また数多くの焼成カラーサンプルを拝見しその製作工程における工夫などをヒアリングした。

また各窯元においては、制作途中の素焼きの状態の製品、また仕上げサンプルを参考にしながら、担当する花器の仕上げについて調整を進めた。そこでは華道家からの要望だけではなく、窯元からの意見や提案も行われ、制作上の制約や、コストにも考慮しながら最終形状・テクスチャーを決定した。さらにやきものの制作現場を見学し、その高い技術や、どのような工程を踏むのかを理解することで有田焼の価値が再認識された。

加えて有田町内にある泉山磁石場、陶山神社で有田の歴史について学び、佐賀県立九州陶磁文化館では数多くの有田焼作品を拝見しながら、歴史や技術の変遷についてお話を伺った。



泉山磁石場



佐賀県立九州陶磁文化館



田島商店（陶土製造）



深海商店（釉薬・上絵具製造）



窯元にて製造工程を見学



㈱ARITA PLUSにてCAD設計、NC切削加工の現場を見学



窯元での打合せの様子



## 12. 制作現場の記録 (2021年8～12月)

伝統工芸品の産地は、毎日の作業を丁寧に行う職人達の地道な努力によって成り立っていると見えよう。有田焼は原料となる磁石（じせき）の採掘業、製土、生地製造、型製造、窯元、上絵付け、上絵具・釉薬製造、転写紙製造、パッケージ製造、道具製造、商社等の分業化されたそれぞれの業種が互いに依存し、信頼関係にあり、そこにある程度の規模があるからこそ産地として成り立っている。これまではそのような産業構造は外部の人間が知る機会は少なく、またその制作工程を垣間見ることほとんどなかった。

今回は花器の開発課程において、4つの窯元と材料製造企業2社のご協力を頂き、有田焼の分業の様子、また産地を支える職人の堅実できめの細かい技術を記録した。

これを研究発表展で公開することで、開発花器の価値を高める効果があると考えた。

また来年度以降、研究発表展だけでなく、有田町内の教育機関等と連携して上映・講演会を行うことも計画している。有田町内の小学校では授業に窯業の現場を訪問するプログラムがある。それに加えて映像による教育を小中学校に向けて、窯元の解説も伴いながら行えばより窯業に対する理解が深まるであろう。また窯業を含め、産業を継続させるためには経済的な可能性だけでなく、従事者への尊敬や仕事に対する誇りの育成など、メンタル面でのバックアップが不可欠である。また産業従事者にとっては、そう価値のない日常の業務であっても、部外者の目には技術の高さや正確さが驚きを持って評価されることがままある。それが当人たちの自信にもつながり、仕事のモチベーションをあげる要因になる。この活動により若い世代が窯業を再認識することで地元愛を育て、それが長期的には後継者の人材育成につながると期待している。



李荘窯



瑞峰窯



徳幸窯



吉右エ門窯



田島商店



深海商店

## 13. 研究発表展

(2021年12月14～18日、コロナ感染症対策のため時間を短縮し開催)

場所：草月会館2階談話室 東京都港区赤坂7-2-21

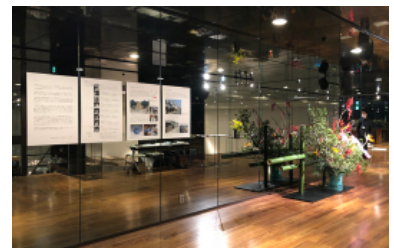
入場者数 合計 471名

研究成果展は、草月流の本部がおかれ多くの華道家が集まる東京の草月会館にて実施した。会場ではコラボレーションによって完成した花器を用いて、華道家がいきこみを行う。研究成果物（花器）は華道家が使うものであり、経験を積んだ厳しい審美眼を通して評価を受けることになる。加えていけばな作品は華道家ではない多くの人々も鑑賞するためのものであり、パフォーマーとオーディエンスの2面からの評価を受ける事が可能となる。またアンケート調査も実施し、今後の研究にとって多数の有益な評価を集めるためには極めて有効な会場であった。同時に多くの来場者にこの取り組みを知ってもらうことで、さらなる協業の機会を増やすことにも繋がった。

草月会館に併設された草月ホールでは国内外の文化芸術関連の催事が行われ、草月流がいけばなという分野を超えた文化振興に貢献していることが伺われる。会場はガラスと鏡で囲まれ、中庭に面した側はガラス越しにイサム・ノグチ氏設計の石庭が眺められ、R246側は赤坂御所の緑が美しい空間である。草月流華道家10名による迎え花を入口付近に設け、会場内には12点のいけばな作品の展示を行った。さらに有田焼の歴史や町内の写真など、有田に関連する解説パネル展示や日本文化遺産・有田町観光ガイド等の冊子配布、花器製造過程の記録映像も会場内にて上映した。また研究発表展期間中には兼頭氏による華道家インタビューが行われ、後に研究協力者内で共有した。



会場となった草月会館



有田町紹介パネルと迎え花



記録映像の上映（常時）



会場全景

#### ギャラリートーク

(コロナ感染症対策のため入場者数を制限し開催)

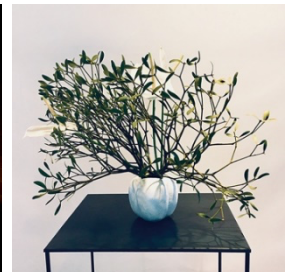
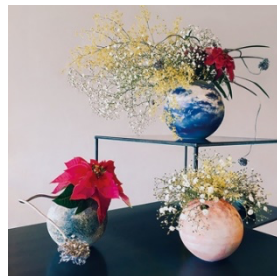
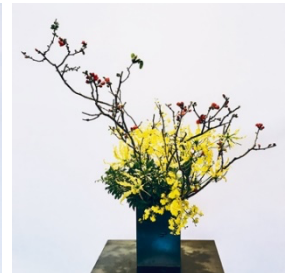
講師：寺内信二氏 / (株) ARITA PLUS 代表

参加者数 32 名

研究者による肥前窯業圏、佐賀大学肥前セラミック研究センターの紹介、寺内氏による有田焼の歴史・特徴の解説、また(株)ARITA PLUS のこれまでの独自の取組み、ARITAXSOGETSU における花器開発について、記録動画を交えながらその製造工程等を解説、ギャラリートーク後には草月流第四代家元 勅使河原 茜氏によるいけばな作品講評を行っていただいた。



ギャラリートークの様子



開発した花器を用いたいけばな作品 (12点)

#### 14. 広報活動

広報の手段として (1) 大学のプレスリリース、肥前セラミック研究センターHP への情報掲載 (2) ウェブサイト作成 (3) DM 作成配布を行った。

ウェブサイト (<https://as.crc.saga-u.ac.jp>) は研究発表展の事前広報と、オンラインによるアンケート回答収集の役割があった。オンラインによるアンケートは数値のグラフ化やコメントの集約が自動で可能なためデータ分析等が容易になる。研究発表展終了後、ウェブサイトには研究の経緯、参加メンバー、いけばな作品、制作現場記録動画、会場地図等を掲載し、今後も内容を拡充する予定である。また研究終了後には研究報告書に加え、研究発表展でのいけばな作品を題材に写真集も作成し、今後の研究活動に役立てている。



ARITA x SOGETSU ウェブサイト



写真集



A4 サイズ DM



研究報告書

## 15. 研究発表展 来場者アンケート調査

研究発表展期間中、来場者へのアンケート調査を行った（集計アンケート数 217 件）。収集方法は①会場内で用紙に記入・回収（164 件）、②会場内に用意した ARITA x SOGETSU のウェブサイト QR コード読み取りによるオンライン上で回答（53 件）。用紙による回答が多数を占めた理由としては来場者の年齢層が比較的高くオンラインアンケートに不慣れであろうこと、また会場一つ一つの作品を見ながら丁寧に回答する傾向があったことが要因にあげられる。

### 研究発表展 来場アンケート調査結果

来場者への質問事項は、有田焼に関する従来のイメージが今回の展示でどう変わったか、この結果は今回のプロジェクトだけではなく、今後の有田焼の商品の傾向や市場開拓にも役立つと考えられる。また来場者は草月流関係者が多数を占めると予想されたことから、主に開発花器に関する評価と、来年度以降の研究の方向性の参考となる質問内容とした。

質問事項は 28 項目である。回答からは有田焼が一般的にどのようなイメージを持たれているのか（伝統的、上品、高価、食器、華やか、和食等）が伺われ、これら主にこれまでの有田焼の伝統に由来する強固なイメージを基調にしながら、今後さらなる可能性として現在いくつかの窯元が取組んでいる新しい表現の有田焼を広めるためのいくつかの課題や可能性が浮上してきた。ここでは研究成果の評価にも繋がる項目をもとに抜粋して分析する。

### 設問7 回答

「これまでの有田焼のイメージが変わった (87%)」

草月流において有田焼のイメージの転換を図ることは、研究の重要目標のひとつである。自由記述式の解答も多いため、来場者にとってインパクトのあるイメージ転換だったと思われる。

この回答結果からは、地元有田では当たり前になりつつある新しい技術や表現を用いたやきものが、一般の消費者にはまだまだ周知されていないことがわかる。今後その点を改善すれば例えば従来の食器市場においても従来と異なるターゲットに向けて参入の余地があると考えられる。また表現だけでなく、有田焼は華奢で薄く、花器として適さないやきもの産地であるという草月流における認識にも変化がみられた。ある程度の厚み・重みなど、華道家にとって花器の使用感は選定の重要な要素であることから、有田焼が花器市場参入に向けて一定の条件をクリアしたと言えよう。また参加メンバーからは、伝統的な有田焼と新しい有田焼の対比も興味深いとの意見もあった。

### 設問9 回答

「展覧会を見ていけばなを習いたいと思った (72%)」

本研究では、花器の展示だけでなくいけばな作品として発表することで、有田焼と草月流双方にメリットが生まれることを期待していた。この回答からは、草月流のいけこみの魅力に加えて、通常では見過ごされがちな花器にスポットを当てることで、改めていけばなと花器の関係性が再認識され、いけばなの奥深さが来場者を惹きつける要素となったことが伺われる。会員数が減少傾向にある草月流にとって、この研究が新規会員を獲得し、状況を打開する可能性を示唆する結果となった。

### 設問11 回答

「今回の花器を使ってみたいと思う (94%)」

回答からは、花器デザイン・素材・質感や色など表現に対する評価が高い。一方で大きさが家庭で使用するには大きい、高価なのではないか等の懸念もみられ、今後の花器制作のサイズ感や価格設定といった面で参考になった。また花器が創作意欲を刺激する要素であることも見て取れる。ただ花器の印象が強すぎるといけばなのうつわとしてではなく、やきものそのものが作品として捉えられてしまうことも興味深い。また製作過程記録映像を見ることで来場者が花器の背景を知り、やきものに興味を持つきっかけになっていることも伺われる。

### 設問12 回答

「有田焼の花器を使うことでいけばなの表現に変化があった(88%)」

研究の狙いどおりに有田焼、草月流の双方が刺激し合い、新しい挑戦を感じられるいけばな作品になっていたとの評価であった。ここでは、やきものと花にはバランスがあり、いけばなにはどちらかを主とする表現もあることを体感し、またお互いがインスピレーションを得て相乗効果を生み出す環境を作り出すことができたと感じた。草月流では花器の重要性を説いているが、どうしても花器よりも花に目が行ってしまいがちである。けれども今回花器にもスポットを当てた展示にすることで、改めて花器と花との関係性を考えていただくきっかけにもなったと感じた。

### 設問13 回答

「展覧会に満足した(90%)」

展覧会全体に対しても高評価をいただいた。高評価の大きな要因として

- ① 新しい有田焼表現への評価
- ② 新しい取り組み（異業種コラボ）への評価
- ③ 新しいいけばな表現への評価

またここでも製作過程記録映像に対する高い評価があり、この素材を今後有田焼の広報や、有田における人材育成に活用すれば効果的であると考えられる。

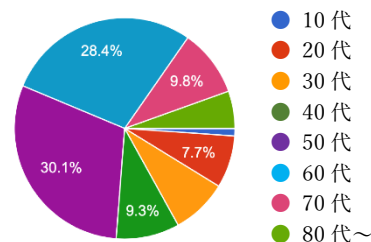
### 設問15 回答

「今後この企画に期待すること」

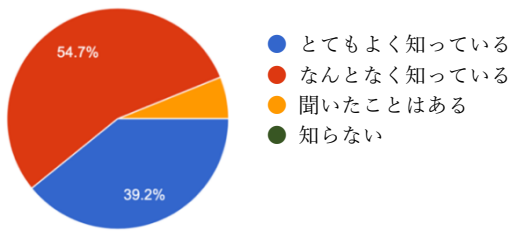
研究発表展を継続して定期的で開催してほしいとの要望が多数あった。草月流にとっても刺激が得られ、会員の想像力を掻き立てる展示になったことが伺われる。また展示方法・開催場所の改善点の指摘もあり、今後の展示に役立てていきたい。

全体的な評価としては、開発花器だけの展示では得られなかったであろう、うつわと花の相乗効果により、草月流において高い評価が得られ今後のいけばな市場への足がかりとして良いきっかけが生まれ、今後の市場開拓に向けての様々なデータが蓄積された研究発表展となった。

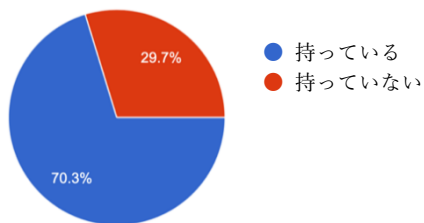
### 1. 来場者の年代 (回答 183)



2. 有田焼を知っていましたか？（回答 212）

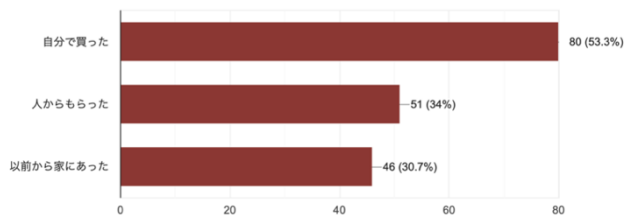


3. 有田焼の製品を持っていますか？（回答 212）



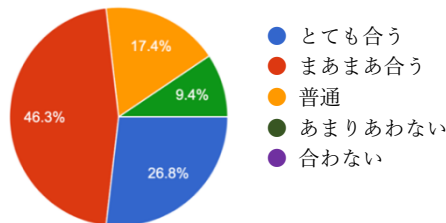
4. （3で持っていると答えた方）

その有田焼の製品はどのような経緯で持っているのですか？（回答 150）

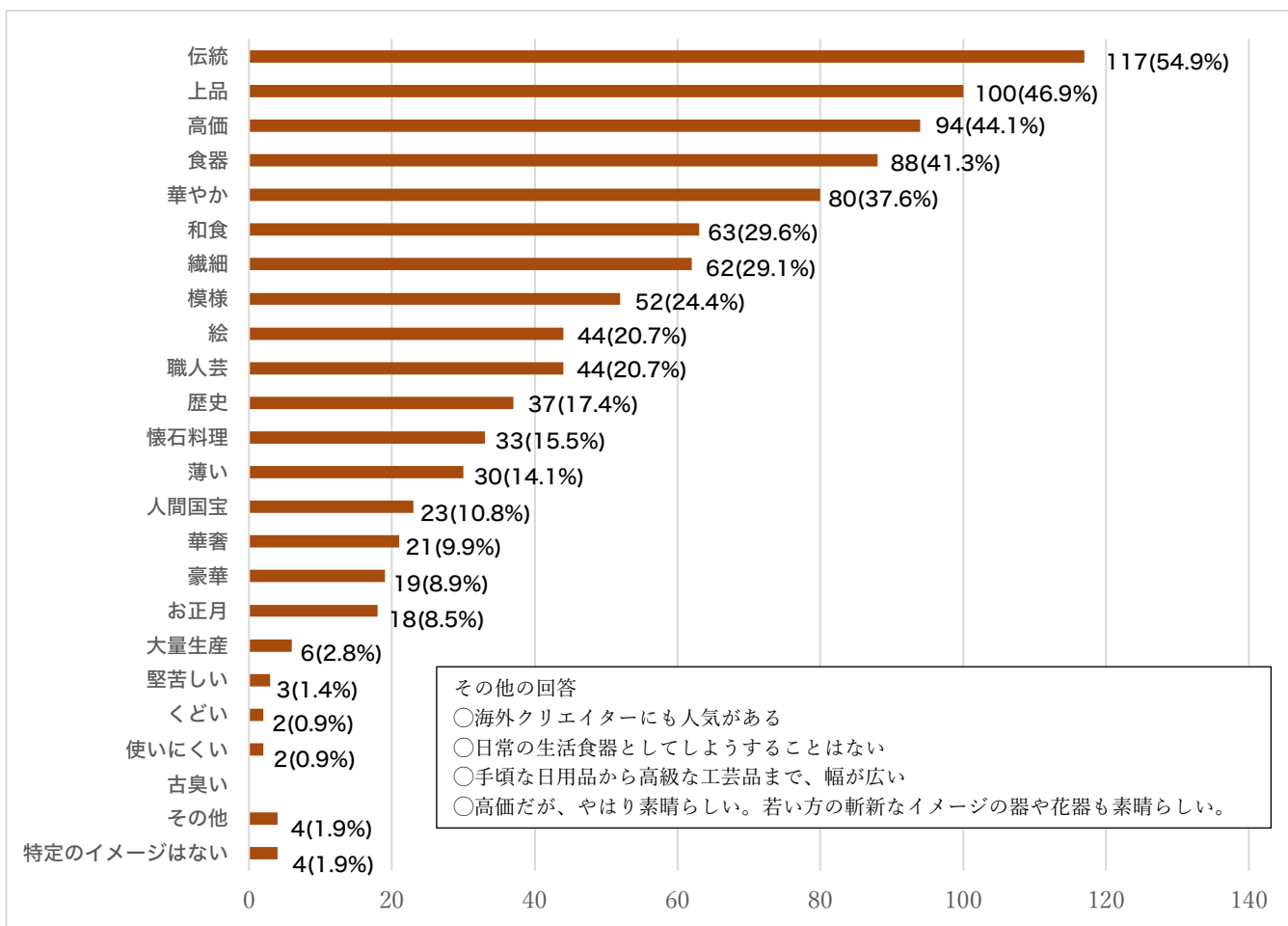


5. （3で持っていると答えた方）

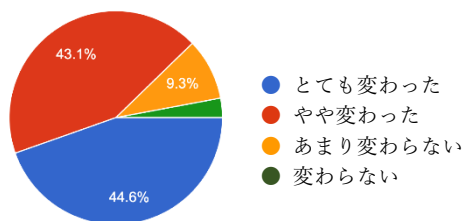
その有田焼の製品は今の生活に合いますか？（回答 149）



6. これまでの有田焼のイメージは？（回答 213）



7. 研究発表展を見る前と比べて有田焼に対するイメージは変わりましたか？（回答 204）



●とても変わった

○良い意味でイメージが裏切られた感じ○様々な色味のものがあった○有田焼は柄模様が特徴だと思っていたが無地の花器があるのは知らなかった○有田焼は華やかな色柄が特徴だと思っていた○未来への可能性を感じた○変わったデザインのものが多く、モダンな印象を受けた○薄くて細かい絵がほどこしてあるイメージが変わった○白地に色絵付というイメージが変わった○白と青だけのイメージから変わった○濃い色、重厚なデザインがあることを知った○伝統的な有田焼で花材といけばなにまで趣きを感じる○伝統的な色や模様のイメージだったが、現代的なデザインも表現できることに驚いた○伝統とともに新しい技術を取り入れていることがわかった○大皿、花瓶、壺というイメージだったが、いろんな形、色も可能なのだと驚いた○良いものと良くないものもある。良いものが4点あった。花器を考えるのであれば形、釉薬をもっと工夫すべき○製作工程を初めて見て、展示作品の繊細さにも驚き、いままでの有田焼のイメージが変わった○進化したという挑戦姿勢や探究心を知った。伝統感だけでなくアート感も感じるようになった○親しみやすい好感が持てるチャレンジ○新しい有田焼と出会った○新しい色使いがシンプル○食器のイメージが強かったので、個性的な花器が多く魅力的だった○食器のイメージが強かったが花をいけやすい花器や遊び心が感じられ、いけばなにあっという間にも良かった○食器のイメージが強かった○食器としての器のイメージだったが、花器の有田焼も素晴らしかった。シンプルなのにどこか上品なものからデザイン性のあるものまであり、花とのコントラストがよく考えられていてとても素敵○食器だけでなく、可能性を感じた○色付けの繊細なこと○色使い、質感、形が今までの観念と全く違っていた○色絵があるのが有田焼だと思っていたが、そうではなく、硬質な感じ、逆にちりめんきりこみのようなものもあり、多様なものと思った○色も形も今までのイメージと違って素敵○色のイメージ○色、柄、形、見たことのないものだった○やきものに対するイメージが変わった。特に色○自分の考えていた有田焼とはイメージが違う○思っていたより、華やかでかわいい○作製行程がイメージと違って○細やかな模様など、ただ見るだけでは伝わらない（知らなかった）部分を知ることができてより深く有田の息づかいを感じるようになった○今迄の有田焼のイメージとは違う花器ばかりだった○今迄イメージしていた器ととても違って。色、形、雰囲気が大変新しい○今までの絵付中心の器から、現代的な使いやすさの器へと

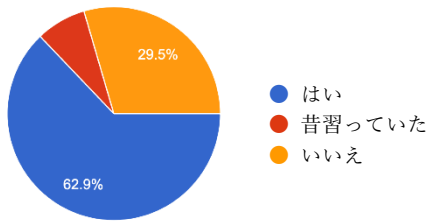
イメージが変わった○固定概念（観念）が覆った○現代的な色つけや形状にとっても驚いた。また有田焼は「型」を作って制作することを初めて知った○形も色、釉薬など自由なことを知った○器の質感○絵柄があり、器そのものを見て楽しむイメージがあった。花器として、花と共演するのが新鮮○絵付のイメージが強かった。個性的でおどろいた。どの花器も素敵。絵つけの技術の方に気をとられていて、器そのものについて（生地？）は全く考えていなかった。製作の様子も見ることができてとても興味を湧いた○花器として、現在のインテリアにもとても合っている。空間を引き立たせている○花をいけるのには合わないイメージがあったが、シンプルな花器は花と調和して美しく感じた○家にあるのと違うから○モダンになったと思う。モダンな質感が良かった○モダンな作品を沢山見られた○モダンでおしゃれ○モダン、ステキ、いけばなが生かされる○デザインも素敵でモダンな感じが今までの有田焼と違った○ダイナミック、クリエイティブ○スタイリッシュな形や美しい色が印象的。デザインから作りあげる過程がとてもおもしろかった○シンプルで使いやすい（いけばな用に）ものが沢山あることを知り親切で魅力的に感じた○シンプルかつ色合い風合いがいけばなと良くマッチしている○シックでモダンなものもあるとわかった○こんな有田焼があったのか！と感動○インテリアの面から考えることができた○いろいろな種類がある○いろいろな作風があるとわかった○いけばなでも使用することができるということ身近に感じるようになった

●やや変わった

○あらためて家にある食器を見直したい。こんなダイナミックな有田焼もある事を認識できた○イメージとは違っているが、可能性を感じる○いろいろあって同じ焼き物には見えなかった！○シャープなイメージも加わった○シンプルな物もあり、花器に良いと思った○デザインから関わりを持って花器を製作し、談話室という場で花をいけ拝見させていただき興味深くなった○ビデオを観て有田焼の製作工程を初めて知ることができた。とても興味深かった。お花と合うように色々な型で作ることができるのだとわかった○もっときれいな（柄）やきもののイメージだった○もっと丁寧に使おうと感じた○一輪挿しや食器のイメージが強かったが、木や大きな花材とも調和している○花器としての魅力発見○花器としての素晴らしさを感じた○花器としての美しさと機能美を感じた○花器としてはあまり触れてこなかった○花器として使うイメージがなかった○花器として使用してみたいと思った○花器の有田焼を知らなかった○絵の描かれた有田焼らしいものではないだけでなく、陶器や磁器からさえも離れ、金属製にさえ見えるものがあった○現代風にもなるのだと新鮮だった○今までにない色や型が見られ、けれども上品な風情は残っている○今まで見たものと形が異なる。こういうものも有田にあるのかと思った○斬新なデザイン。植物（いけばな）がいけやすそうに感じた○おもいのほかバラエティに富んでいた○思ったより形や色などバリエーションが多い

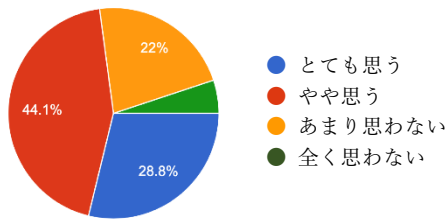
○思っていたより多種○自分が持っている有田焼とは異なっていた○初めて見た○色や質感がたくさんあることに驚いた○色絵付けだけではない有田。陶器のようでもあり、しかし磁器でしかできない透明感が新鮮○食器のイメージが強かったため、花器として作られた作品を見られて新鮮だった。形がより自由で個性的で面白い○食事の際に使うだけでなく、花器としても美しい○新しいスタイルに挑戦している○いけばなに合うシンプルな作品が良かった○透明感や華やかな色付けではない。上等品といった感じではなく表面のザラザラ感、絵付けでない技法による色や模様に興味を覚えた○美術的レベルがとても高い○明るい色のものがあるのを知らなかった○有田焼＝絵付けのイメージが強かったが、今回の作品には絵付けの作品がなく、器の繊細さが際立っていた○有田焼がどういうものなのか分かった○有田焼に持っていた色、形などがとても新しい○有田焼の花器もとてもシンプルで使いやすいと思った。表面の仕上げもそれぞれ面白い○有田焼の美しさと、いけばなの魅力が一つの作品としてコラボレーションしているので、今までと作品を見る視点が変わった。どの花も花器も本当に素敵○力強いイメージやミニマムなイメージを見ることができた

8. いけばなを習っていますか？ (回答 210)

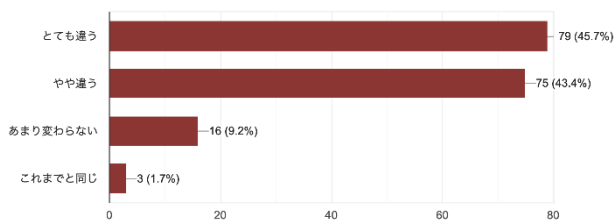


9. 8で「昔習っていた」「いいえ」と答えた方)

この展覧会を見ていけばなを習いたいと思いませんか？ (回答 59)

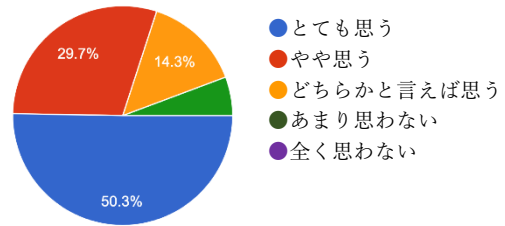


10. 今回の有田焼花器はこれまでの花器と違う点がありますか？



11. 今回の花器を使ってみてみたいと思いますか？

(回答 175)



●とても思う

○小さい花器であれば家でも使えそう○いけやすそう○お花に寄りそっている感じがとても良い○きれいで上品だから○すてきだった○とても美しかった○どの花を使って花器と合う作品に出来るか楽しみになる花器○トライしたい○どれも素敵で、そこにあるだけで華やかで上品な空間になりそう○ユニークなので○以前いけばなをならっていた。陶芸を趣味にしているため○映像でつくる過程もみたので○花が映えそうだから○花器からイメージがわいてきそう○花器から刺激を受ける○花器の型、色が良い○花展に使えそう○華やかなものから、シックなものまで、多様性に魅力を感じた○丸いのが好き○自分でもこれらの花器で作品を考えてみたい○自分の花をいけてみたい○質感がとてもすてき○重厚でいて繊細な花器にお花を合わせてみたい○色と形が気に入った○生けやすい花器が多かった○生け花と花器が良く合っている○素敵だった○創作意欲がわく○創造意欲がかき立てられる○造形的で大きさも花展向き○他では見たことのないデザインが多くすてき○他で見たことのない形や質感が魅力的○日々の生活が楽しくなりそう○美しく、空間に溶け込む雰囲気を感じた○暮らしの中にとり入れてみたいと、あこがれる○有田焼の可能性を感じる

●やや思う

○気に入った花器があった○使ってみたくとも思うが、高級そうで使うのは怖いような気もした○自分で作るのは楽しい○きれいで家に飾ったら美しそう○これまで使ってきた花器には無い○シンプルでつかいやすそう○それぞれの花に合う花器だったので、花だけでなく花器とトータルで美術品として飾りたいと思った○一度いけてみたい○楽しくいけられそう○重さが少し気になる○清潔感のある花器で食卓など身近な場でも活かしたい○白い花瓶で華やかな作品をつくりたい

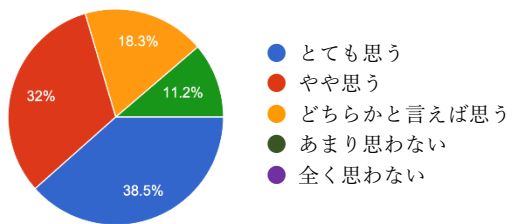
●どちらかと言えば思う

○使ってみたくとも思うが自宅では○家でも使えるサイズ感、初心者でも花を飾りやすいタイプのものがあれば、使ってみたく○形が面白い○現代の家にも合いそう○使ってみたくも腕がない○すでに花器を持っていて家族がいけてくれるから自分では難しそう○上品

●あまり思わない

○花器自体に特徴がある。どちらかといえば飾り物に近く感じる○場所を選ぶ花器だと思う

1 2. 有田焼の花器を使うことでいけばなの表現に変化があったと思いますか？（回答 169）



● とても思う

○花器に注目して今まで花展を見ていなかったから○伝統に乗り、またそれを乗り越えていくことの素晴らしさ○お花と花器の相乗効果○お互いに影響をうけあっている○どちらも芸術的でよかった○花だけでなく花器のこだわりも相まってより魅力が増す○花器がただの入れ物でなく作品になっていた○花器の色と形がやはりきれいだった。いけるのが難しいだろうなというような形が多い中で、草月のダイナミックさが生かされていて、見ていて楽しかった○花器からインスピレーションを得て花をいけ楽しみがある○花器が花を生かしている○花器と花の存在感がどちらも引き立つ○花器と花がどちらも美しかった○花器の形や質感より考えて生けるお花の様に感じた○花器をいけばなに合わせることを初めて知った○花以外も楽しめる○器の持つ印象含めて、表現の幅が広がる○形によっていろいろイメージが湧く○新しい素材や、使ったことのないものに出会うと、必ず何か新しいものができると思う○素敵だった○相生する○日本の伝統と伝統が組み合わさり、さらなる力を感じるいけばなになったと感じた○有田焼の花器をあまり見た事がなかった○有田焼の窯元ならではの技術がなせる花器である○有田焼は和食器（皿）というイメージが強かったのが、いけばなのコラボはとても新鮮だった

● やや思う

○オリジナルな感じが良い○それぞれの花器のもつ色にとっても惹かれた○より日本的、かつ革新的になったのでは？○花が主役になっていた○花の表情に合う花器で作品の魅力が引き出されている○花を引き立たせる要素がある花器が沢山あった○花器口を生かした感じがした○器から受けるインスピレーションを軸に作品が考えられていた○器との関係により華やかさが出せそう○高価な感じがする○使ってみたい○色味や厚みも含めて親しみやすさやあたたかさを感じた○洗練された花器の力で、いずれもの作品も上品で素敵だった○草月の自由な表現に添うものだと感じた○有田焼→伝統的→身近な生活場面でも相乗効果が感じられた

● どちらかと言えば思う

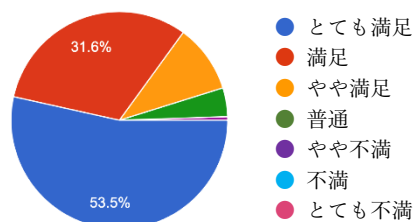
○今までの有田焼は表面がツルツルして透明感や華やかさを強調していたが、表面のザラザラ感やマット状のもの釉薬を泡状にして吹き付けたり等工夫し変化に富んでいる○大きな花材も重くならず繊細な感じがした。和と洋の中間的な印象を受けた○コラボレーションとはお互いの魅力を十分に引き出しあうこと。

その主旨を生かした作品は1、2点○有田の花器でいけばなは表現が変わったというよりは、いけばなの表現に有田の花器が合っていたと感じた

● あまり思わない

○いけばなを見にくるのが初めてなのでわからない○いろんな花器でいけるので○どうしても慣れた生け方で上手にまとめようとしているから…上手だから…どんなものにもいけられる方たちなのでもっと変化があったらと思う○花器をみていけ方や花（素材）のイメージがでることが多いので影響がかなりあると思う○今までいけばなを見たことがないので、よくわかりません○いけばなについてはよくわかっていない事が多いので、答えられない○判断できるほど要素がない○表現者自身が変化できるかによる気がする○有田焼かどうかは別として、器をとっても意識した作品になっていた

1 3. 展覧会に対する評価を教えてください（回答 187）



● とても満足

○良い花展でした○慌ただし時期に素敵ないけばなを拝見し落ち着いた気持ちになれた○新しい試みは大変なことだと思うが、これからもっと面白くなりそうな予感があった○いろんな趣のいけばなや花器を見ることができ、また有田焼が出来上がるまでの工程を映像で見ることで、さらに理解が深まった○完成した物と空間を共有しながらの花器の作成ビデオの内容が、窯元の想いに対する想像力をかき立て、また現代の有田焼の製作過程がとても興味深かった○いけばなや花器も素敵。有田焼の新たな試みへの想いが素敵○沢山の作品を見られた○動画がとても素敵○観て楽しいだけでなく、説明や解説をしてもらいながら鑑賞することができた。ドキュメントムービーも理解を深めることができとても面白かった○それぞれの作品が花器の特性を引き出していた○制作工程の映像も見ることができおもしろかった○場所も良いし、広々とした空間でゆっくり見られた。いけばなの展示会は初めて訪れたので、良い機会を与えて頂いた○作品1つ1つのデザイン性にとってもひかれた○有田焼の工房映像を見られたのが良かったお花も生き生きしていて素晴らしかった○続けてください○すばらしい。おつかれさまでした○新しい花器に挑戦されておられるのが素晴らしい○素敵な作品がいっぱいあり、きれいな作品で魅力的に感じました。斬新なデザインの花器がたくさんあり有田焼のイメージが変わった○楽しかった○すてきな作品をたくさん見させていただき、嬉しかった○どれもとても素敵なお作品○すてきな場所だから○有田焼の新たな取り組みを知ることができた○思っていたのと



違った。相互に良い影響をうけていてとても良かった○展示方法や作品数がとても見やすかった○新しい経験をさせていただいた○器と花の創作力のぶつかり合いが楽しかった○とても楽しく、勉強になった。花器と花の作品のとりあわせ、いけ方○新しい有田焼を見ることができた○ひとつのやきもの産地とのコラボはおもしろい○花材も会場のレイアウトも良い○器と花とのマッチングが素晴らしい○お花（花材）と花器がマッチしていてどちらも楽しめました○コラボレーションが新鮮でした○展示の点数もちょうど良く、いけ手の想いが伝わった○花器といけばなのコラボがすてきでした○とても深い内容。完成度も高く素晴らしい○新しい有田を知るきっかけとなった○これほど器と花が拮抗して心地良い緊張感も感じさせてもらった展覧会はあまりなかった。とても良い気持ちの作品で来てよかったと思った○工程の動画もあり興味深かった○まとまりのある展覧会と思う○素晴らしい作品に出会うことができた！○バラエティに富んだ作品に出会えた○華やかだった○器のデザイン、いける人、器を作る人のコラボレーションでできあがった展覧会。楽しめた

#### ●満足

○有田焼のイメージが広がった。花によく合う○花器に気を遣いすぎて、いけばなの表現が出ていない○季節にあう植物などのコンセプトはどうなのか、とも思いました○皆さん工夫されていました○美しかった○もう少し大きなものも見たかった○器を意識していて、花も生かされている。○もっと有田焼の魅力を表現しても良かったのではないかと○ゆっくりと「いけばな」と「花器」と楽しむ事ができた○とてもきれいでした○たまたま入ってきれいなものが見られてラッキーだった○会の大きさが良い（小さすぎず、大きすぎず）○とてもよい企画○有田焼という伝統ある花器というデザインから企画できた花いけ展がすばらしい

#### ●やや満足

○いわゆる絵のかかれたような従来の有田焼もあったほうが違いがわかって尚よかったと思う○器を活かしていない作品が多かった。器の特異性をみせたいのか、自分の花の力を見せたいのか、見ていて肩がコル。これは自分のいけばなの特徴を見せたいのか、両方は難しく見ている人を惑わせる

#### ●普通

○作品数が少ない

#### 14. 今後この企画に期待することはありますか？

(回答 42)

○感動しました。すばらしい企画ありがとうございます○あればまた伺いたい○いつも楽しみにしています○お花だけでなく、花器や背景、音楽など、いろんな要素と合わせて楽しめる企画もあれば見てみたい○このすばらしい花器のレンタルが出来れば試してみたいと思う→購買へ○さらに大きな作品が生まれること○ぜひ今後も継続する企画にしてほしい○デモンストレーションや花器販売○とても良い企画であり、次回を楽しみにしています。

もっとすてきな企画を！！良い企画で楽しみ○またあれば見たい○またの機会を楽しみにしています○また開催してください○また見たいです！○また素敵なものを見せてください○ムービーがこの企画用に作られたということでしたが、別の機会や媒体でも観られたらいいと思う。（友人にも観てもらいたいと思った）また企画においては、解説付きのパンフレットもあっていいのかなとも思った○もっと作品の数を観たいとも思いました。○違う季節でもまた見てみたい○違う季節の植物とのめぐり合いを拝見したい○益々頑張って、新しい試みをして欲しい○花器としてならばある程度の強度が必要。強度や器の大きさ、多方面（例えばタイル等）でも使用可能なのかが解れば使用したい○花器として売り出した時の価格設定が重要。一般に売るのが、あくまでも美術品として販売することになるのか見守っていききたい○花展としてみる作品はすべて美しかった。コラボレーション展の意味を理解して花制作を。（理解して制作している作品は、1.2点）○器ができるまでの映像はとても興味深く勉強になりました。有田焼の挑戦を広く宣伝してください！次回に期待しています○器もいけばなもお互いに相乗効果がありそうで期待します○季節を変えるとまた違うものが見えそう○継続して頂きたい○作品のストーリーを表示して欲しい○次回は自作デザイン花器に付けてみるもの見てみたいと思った。いけばな作者の思いも表現されると思う。次回も期待しています○次回展もあると嬉しいです！○従来品とネオ有田を対比して見てみたい○初めての試み、次回は、すべての作品がいけ手がデザインしたものを拝見してみたい。（花制作、器デザインは同じ）○小さな一輪挿しでも良いので、購入できたら良いなと思った○世の中に広まっていくことを期待する○是非、第2弾が見たい○是非、長く続けていただきたい○是非有田焼の新しい取組も続けてほしい○いけた方のコメントがあるともっと注意深く観ることが出来る○製品化の実現に向けて、また企画されると良い○続（次回）けてほしい！○続けてやっていただきたい○多くの人が見られるような場所での展示や、日本国内だけでなく海外にも紹介できるようになってほしい○定期的な開催があれば良い○定期的にやって欲しい○有田で開催して頂くことにより、都会の空気感との違いを感じてみたくなった

#### 16. 研究協力者を対象とした第2回アンケート調査

(2022年1月)

研究発表展の後、リモートにて会議を行い今年度の活動は終了した。東京での研究発表展を研究協力者数名が観覧できなかったこともあり、来場者の直接の反応や、会場アンケート結果をもとに情報を共有した。また今後に向けての方向性を見出し研究業務の改善を図るため、参加メンバーに対して再度アンケートを行った。

アンケートの質問事項は「花器制作に携わったことで有田焼/いけばなに対する認識に変化があったか」「達成できたと感じる点」「今回の反省点」「成果品(花器)に対する評価」「展覧会に対する評価」「今後この企画に何を

期待するか」等の 17(窯元)、21(草月流)項目である。これらアンケートから参加メンバーの本研究に対する評価を以下のようにまとめた。

有田焼窯元の回答：

本研究の成果としては、有田焼の可能性を拡げることができ（有田焼が美術品と食器だけでなく、表現のための道具も作成できるという可能性を見出すことができた。有田焼の製品の幅を伝えることができた。新たな市場開拓へのきっかけとなった等）、来年度以降も参加したい（新しい分野への挑戦は刺激があり、何より楽しめた。一度だけのコラボレーションでは学びが足りないのでまた参加したい等）との意見があった。製造に関しては、食器にはない工夫が必要だったことが伺われ（これまでにない大きく、厚いサイズの製品だったため、製作上の工夫が必要で、スケジュールとの兼ね合いが一番難しかった。形状のバランスが難しい。食器と異なり、技術的に製作できる職人が限られる。生地乾燥にかなりの時間がかかり、作業スケジュールが予想しにくい）、これは今後の大きな課題としてあげられ、製品サイズや形状・納期との兼ね合いが重要になってくるであろう。また記録映像には「記録映像により製作の背景を伝えることができた。自身でもドキュメンタリー番組のようで面白かった。日常の作業が驚きを持って感動していただけた。」等の意見があり、長期間に渡り窯元に協力していただきながら撮影を行った成果として高く評価された。この意見からは記録映像を様々な方面に向けて発信することで、作業に携わる職人のモチベーションの向上に繋がる可能性を示唆している。また窯元のこれまでのいけばなに対するイメージにも変化が見られ「いけばなによって花器が異なる表情を持つことが驚きであった。」「いけばなの配置に気にするようになった」等、いけばなにおいて花器が表現の一部であることに関心が向いていることがわかる。

華道家との協働作業に関しては、フランクなやり取りであったとの回答があり、今回の研究を進める上で重視した研究協力者間の対等な関係が実現できたと考えられる。

「日本文化に触れることで日々の生活が豊かになることを知ってほしい」「表現と表現は喧嘩もすれば潰しあいもあって、活かしあいもあるということ」が次世代に伝えたいことにあげられ、本研究を通して表現者としての面から窯業の人材育成に役立てたいという意識が感じられる。

また今後の課題としては、「もっと華道家を知るべき」「広報と販売方法をもっと検討する必要がある」「今回のような機会を今後も設けてほしい」とあり、これは草月流からも同様の意見があった。この点に配慮しながら今後の研究活動を行うことが望ましいと言える。

草月流華道家の回答：

研究発表展により有田焼のイメージを一新できたとの意見があり、これは参加華道家だけでなく、研究発表展に来場者の意見を踏まえての評価である（従来の有田焼の花器は花の絵柄や染付の様子が施され、花器それだけで芸術作品といえるようなものであった）。製品の性能に関しては、これまでの華奢というイメージが変わり、しっかりとした丈夫な製品でいけばな作業をスムーズに行うことができたとの評価で、今回の製品が華道家の要望に十分に応えられる機能性を有していたと言える。

また有田町を訪問し、実際に製作の現場や窯元と交流することでその技術の高さやプロ意識を肌で感じ、時代に合わせて変化しながら産地が続いて来たことに驚きをもって認識したとの意見があり、産地訪問によりそこにある歴史を学び、現場を実際に見聞することの重要性が改めて確認された。

次の世代に伝えたいこととして「有田焼の多様性」「日本文化の素晴らしさ」に加え、「常識に縛られないこと」「感性を大事にすること」「時代に沿って変化すること」などがあげられ、これまでの草月流華道家の作品に対する姿勢に加え、新しい取組みを通して更に広い視野で作品に対峙する姿勢が伺われた。さらに有田焼は食器や絵付けだけではなく様々な高い技術をもっとアピールすべき、との意見があり、今後の参考にしたい。

アンケートからは本研究の今後も研究を継続させるためには「相互の熱意・モチベーションの維持」「意見交換」「関わる人全てにメリットがあること」「資金調達」「計画性」「販路」「いけばなへの理解」が必要であり、長期的には「多くの人に日本の伝統的な文化や工芸品に触れてもらい、日々の生活が豊かになることを知ってもらう」「言語を超えた、季節を感じる高尚で神聖な大人の遊びにまで高める」「コラボレーションを世界の有田焼・草月流ファンに知ってもらう」など、いくつかの要素があげられた。

また全員が来年度以降も研究への参加希望があり、今後の研究継続への意欲と期待の高さが伺われた。

以上から本研究では窯元がこれまで未知の世界であったいけばなの市場におけるやきものの可能性を感じることができたと言える。お互いの技術や芸術的能力を知り、ディスカッションを通して作業を進めることで、今まで以上に表現や新しい技術への挑戦が可能となった。

## 17. おわりに

### 1) 研究の波及効果

これまでの過程において研究に関連した外部からの協力依頼が数件あり、そのうち 2022 年リニューアルオープンした佐賀県立九州陶磁文化館第 1 展示室では

映像「様々なコラボレーションと研究開発、新しい製品づくりへの挑戦」の中で「幅広い分野のアーティストとの共同開発」として紹介された（常設展示）。

また 2022 年 5 月 19～24 日に博多阪急にて開催された「家元継承 20 周年記念福岡支部展 草月いけばな展」において片山健師範ご指導の元、ARITA×SOGETSU『有田焼との語らい』コーナーが開設され、ニュースでも取り上げられた。



佐賀県立九州陶磁文化館第 1 展示室の映像



家元継承 20 周年記念福岡支部展 草月いけばな展  
ARITA×SOGETSU『有田焼との語らい』コーナー

## 2) 研究成果と今後の取組の発展性

本研究では、長期的に取組を継続させることで異分野の専門家との対話やその存在が起こす気付き、創造的な化学変化、自律した創造に対する姿勢の醸成、開発成果からもたらされる自らへのフィードバックが起こすモチベーションの変化などを、インタビュー等を行いながら記録して能動的なパターンを発見し、伝統工芸産地の持続可能な新製品開発プロセスのロールモデルを創ることを目的として活動を行ってきた。

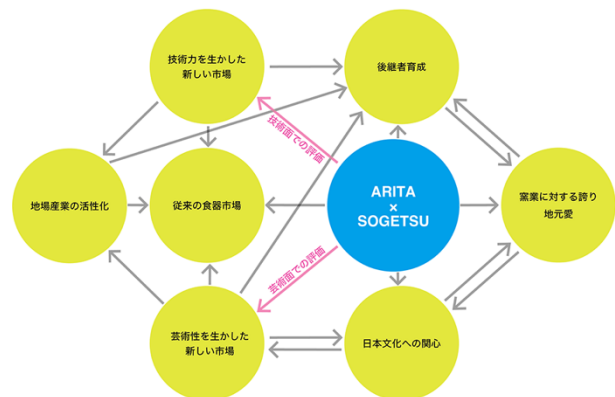
今年度は華道家との協働による製品開発において、有田焼が持つ技術の高さや芸術性をどこまで発揮できるのかを実践による試行錯誤の中で明らかにした。また研究発表展においては、成果物（花器）の展示という意味合いだけにとどまらず、いけばなという芸術作品の一部としてのやきものの役割を果たし、華道家と窯業者のコラボ

レーションにおいて今日的なデザイン手法が有効であるかを検証した。

本研究からは有田焼と草月流とのコラボレーションにより、花器だけでは表現できなかった、観る人を惹きつける芸術作品にまでやきものの価値を高めることが可能となることがわかった。またリモートによるやり取りでも資料やオンラインミーティングなどを通し、ある程度の研究協力者間の理解は進むが、やはり産地の雰囲気や実際の作業現場を見学し、製作に従事する職人の工夫や現状を肌で知り、お互いが対面で意見交換することが成果の完成度を高めることも確認した。そこでは研究協力者同士が対等な立場で意見交換することが何より重要であり、ファシリテーターである研究者が研究協力者からの様々な意見に耳を傾けその調整役に徹することが、研究をスムーズに進行するために最優先させるべき事項であることを再認識した。

また今年度は広報が不十分であり、また販売面においても手法が整備されていなかったため、今後はその点を重点的に強化する必要がある。

さらに今後いけばなに関連したイベントを地域において開催することで、いけばなを通して地域の人々が日本文化に触れる機会を得、豊かな日常を創出し、また若い世代がこの研究を通して地元窯業への理解を深め、次世代の後継者や地元に対する誇りや愛着心をも育成することも可能となるであろう。



本研究の期待される効果

今後も窯業と華道との関わりを長期的に続けていき、互いの新たな芸術性とそれに伴って発現する新しい市場を開拓し続けるにはどのような視点や手法が必要であるのかを研究協力者とともに探っていく。最終的には本研究成果を地域に還元することによって、研究協力者である窯元がこれまで関わることの少なかった食器市場以外の分野にも躊躇なく踏み出せるプロセスを理解し、新しい芸術性を見出し、それによって新規市場を開拓していくことで、他の未経験分野の市場に対する積極的な挑戦を促すことが可能となり、また今回の研究協力者だけで

なく、肥前窯業圏全体、また草月流においても幅広く取組みが拡がることが期待され、そのような挑戦的な姿勢を持つ窯業者の増加により、産地が生き残ることができると考えている。

- 1) 窯業が歴史的に重要な役割を果たしてきた佐賀県と長崎県にまたがる8つの市町(有田、唐津、伊万里、武雄、嬉野、佐世保、平戸、波佐見)を指し、日本遺産「肥前やきもの圏」として注目されているエリアである。  
(<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story037/>)
- 2) 詳細は後述の「3. 研究協力者」参照
- 3) 地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するもの (<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/index.html>)
- 4) 肥前窯業健活性化推進協議会、日本遺産公式ガイドブック「日本磁器のふるさと肥前」、P2~6
- 5) 有田町役場商工観光課「有田町観光ガイドブック」、P3~4
- 6) <http://arita-episode2.jp/ja/>
- 7) 竹田英司「佐賀県有田町の稼ぐ力に関する調査研究」長崎県立大学論集(経営学部・地域創造学部)第54巻第3号、P39
- 8) 工藤昌伸「いけばなの道」、主婦の友社、1985
- 9) 池坊(いけのぼう)、草月流(そうげつりゅう)、小原流(おはらりゅう)

## 謝辞

(株)ARITA PLUS 寺内信二氏、原田耕三郎氏、徳永弘幸氏、原田吉泰氏、一般財団法人 草月会、草月流 内藤華了氏、後藤麗美氏、平井夏光氏、遠藤桜泉氏、小野清翠氏、金子翠生氏、齋藤庭黎氏、勅使河原明美氏、橋爪千峰氏、柳沢香翠氏、有田町役場 まちづくり課 地域おこし協力隊 老岐成太郎氏、商工観光課 地域活性化起業者(ANA総合研究所)兼頭理織氏、yd 阿部 克昭氏、OKURA WORKS、関谷幸三氏、(株)田島陶土、(株)深海商店、佐賀県立九州陶磁文化館、佐賀県文化・スポーツ交流局 文化課、佐賀県有田町歴史民俗資料館、有田観光協会に多大なご協力をいただきました。ここに深く御礼申し上げます。

## 参考文献

- ・勅使河原 蒼風「花伝書」草月出版、1979
- ・勅使河原 蒼風「草月五十則」草月文化事業出版部、2004
- ・勅使河原 茜「いけばな」角川書店、2011
- ・勅使河原 茜「いけばな」主婦の友社、2001
- ・吉村貞司「いけばなの美学」泰流社、1980
- ・G.L.ヘリゲル「生花の道」福村書店、1966
- ・NHK エデュケーショナル「NHK 日曜美術館 1976-2006」日本放送出版協会、2007
- ・白洲正子「雨滴抄」世界文化社、1996
- ・森山明子「まっしぐらの花」美術出版社、2005
- ・水尾比呂志「いけばな」美術出版社、1966
- ・渡来徹「ととのえるいけばな」彩流社、2020
- ・E.H.シャイン「プロセス・コンサルテーション」白桃書房、2002
- ・E.H.シャイン「人を助けるとはどういうことか—本当の「協力関係」をつくる7つの原則」英治出版、2009
- ・「SOGETSU 2021 年春号」草月文化事業株式会社、2021
- ・「SOGETSU 2021 年夏号」草月文化事業株式会社、2021
- ・「ふでばこ」33号「万国博覧会 佐野常民と有田焼」白鳳堂、2016
- ・「ふでばこ」28号「有田焼」白鳳堂、2013